授与機関名　順天堂大学

学位記番号　甲第 2148 号

Risk Profiling of Cancer Treatment-related Cardiovascular Disorders in Breast Cancer Patients Who Received Adjuvant Chemotherapy With Trastuzumab

トラスツズマブ補助化学療法をうけた乳がん患者におけるがん治療関連心血管障害とそのリスク因子に関する研究

信濃　裕美（しなの　ひろみ）

博士（医学）

論文内容の要旨

医学の進歩によりがん患者の生命予後は向上したが、分子標的薬等の最新治療に伴うがん治療関連心血管疾患(cancer treatment-related cardiovascular disorders ： CTRCD)が世界的な課題となっている。本研究の目的は、腫瘍循環器学(Cardio-Oncology)という観点から CTRCD に対する心機能評価の重要性およびその危険因子を明らかにすることである。研究方法は、2010 年 4 月から 2016 年 12 月まで順天堂医院でトラスツズマブによる初期治療（術前・術後補助化学療法）を受け、ベースライン（BL）およびフォローアップ（FU）の心機能評価を受けた連続 141 症例の早期乳がん患者を対象とした後ろ向き観察研究である。追跡期間の中央値は 11 か月で、その間の循環器内科コンサルテーションは 22 例（15.6%）、非可逆的 CTRCD による治療中断は 3 例（2.1%）であった。期間中の死亡例はなかった。主な併用療法は、アントラサイクリン（94%）と放射線療法（53%）であった。左室駆出率（LVEF）の中央値は 67%（BL）から 63%（FU）に低下していた（P <0.0001)。LVEF 低下症例の割合は、閾値毎に FU <90%BL が 26%、FU<BL-10%が 14%、および FU <53%が 5.0%であった。CTRCD（FU <BL-10%かつ FU <53%）群では心血管リスク因子（CVRF）が有意に多かった（43%対 3.7%、P = 0.02)。多変数解析では CVRF と CTRCD は有意に関連していた（OR、11.96; 95% CI：1.30-110.3)。本研究結果から、本邦でも多数の無症候性心機能低下と、稀ながら非可逆的 CTRCD によるがん治療中止症例が存在することが示され、心血管リスク因子（cardiovascular risk factors:CVRF）が独立した予測因子である可能性が示唆された。